

浪江宣言

13・03

協働復興まちづくりに向けた具体像と、実現へ向けた協働の仕組みの提案



なみえ復興塾

まちづくり NPO 新町なみえ

協力：浪江町

早稲田大学都市・地域研究所＋都市計画佐藤滋研究室＋交通計画浅野光行研究室

2013年3月9日

浪江宣言 13・03 ー協働復興まちづくりに向けた具体像と、実現へ 向けた協働の仕組みの提案

発行

2013年3月9日 第一刷発行 ©

2013年5月9日 第二刷発行

特定非営利活動法人・まちづくり NPO 新町なみえ

住所：福島県二本松市郭内1丁目81番

電話：080-2800-0653

印刷 / 製本

(有) 3 プリントサービス

編集

早稲田大学都市・地域研究所＋都市計画佐藤滋研究室＋交通計画浅野光行研究室
事務局

早稲田大学都市・地域研究所

住所：新宿区早稲田鶴巻町513 120-4号館005室

電話：03-5272-6192 内線：3038

2012年10月1日からの活動は科学技術振興機構社会技術開発センター「広域
避難者のための多居住・分散（統合）型ネットワーク・コミュニティの形成」研究
プロジェクト等の資金により運営されています。また、総務省域学連携事業などの
事業も一部含まれています。

本報告書に記載されている内容は、「まちづくり NPO 新町なみえ」主催で開催された「なみえ復興塾」におけるワークショップを経て、浪江町民の皆様の意見交換や提案をもとにとりまとめたもので、2012年8月に発行した「浪江復興のための道筋と24のプロジェクト」に続くものです。この経緯は巻末にあるとおりです。

記載されているプロジェクトの実現可能性、技術的検討は未だ不十分であり、原発の収束状況や除染進捗等に応じてさらなる検討が必要です。しかし、ここでは、現在の状況を踏まえたうえで、浪江町復興への町民の思いをできる限り具体的なイメージとして描いたものです。

なみえ復興塾での模型を使ったワークショップや、プロジェクトのイメージについては、早稲田大学都市・地域研究所+佐藤滋研究室及び浅野光行研究室との協働で進めて参りました。この長期的な被災地の復興を継続して成し遂げる為に、支援・協力する側の専門家を現場で育てることも重要です。学生や若手研究者が叱咤激励を頂きながら成長する貴重な学習の場となっていることも、付記します。

また、これまでさまざまな地区において様々な提案がされており、それらを参考にさせていただいています。全ての先行提案等を、注記することはできていないかと思いますが、ここに記して感謝の意を表します。

ここでの提案を今後の浪江町民の皆様の生活再建やコミュニティの復興に向けた検討や、浪江町復興計画の策定などにおいて、参考にして頂ければ幸いです。

2013年3月9日

浪江宣言

13・03

私たち浪江町民は、東日本大震災の地震・津波災害に加え、福島第1原子力発電所事故により、考えてもみなかった悲惨な状況におかれています。中でも原子力発電所事故当初からの東京電力と政府の対応に対しては憤りを禁じ得ません。事故とその後の町民を苦しめた対応に関して徹底的な検証と、町民と町への正当な損害賠償、補償、そして苦痛に対する慰謝料などの支払いを求めるものです。

しかし、町外にバラバラに避難することを強いられている私たち浪江町民は、国や県による賠償や復旧・復興事業を求めるだけでなく、浪江町行政と協働して、自ら復旧・復興のまちづくりに取り組むことにより、このような人類の歴史上あり得ない災害を乗り越え、どこにも実現できていない歴史に残る素晴らしいまちづくり・地域づくりを目指さなければなりません。

なみえ復興塾では2012年8月に、多くの町民の方々とワークショップや議論を元に、「浪江町―復興への道筋と24のプロジェクト」を発表しました。2012年10月からは、これを出発点にして、より具体的なプロジェクトを検討してきました。これらの構想を広く町民の皆様に提言し、理解をいただき、実行するための体制整備と具体的な動きを始めたいと考えています。

今回発表する「浪江宣言13・03 協働復興まちづくりに向けた具体像と、実現へ向けた協働の仕組みの提案」はまさに、私たちなみえ復興塾に結集した者達の決意であり、復興に取り組む宣言でもあります。これらを元にして、国・県そして浪江町行政が推進する生活・産業基盤の復旧・復興と連携し、避難先である二本松市や福島市をはじめとする自治体・市民・さまざまな組織とも連帯して、私たち浪江町民や市民団体、NPO法人、福祉事業者や民間企業、産業団体などが協働して、復旧・復興まちづくりに取り組むことを宣言します。

2013年3月9日 なみえ復興塾 一同

目 次

浪江宣言 13・03

浪江宣言 13・03 2. 総意を協働復興の力に・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1p

協働復興まちづくりに向けた具体像と

実現へ向けた協働の仕組みの提案・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3p

1. コミュニティをネットワークする統合型移動システム「新ぐるりんこ」 4p
2. 避難先の中心市街地に協働復興街区を建設する「まちなか型町外コミュニティ」 8p
3. 仮設住宅団地と周辺に形成される「郊外型町外コミュニティ」 14p
4. 浪江町への帰還の起点となる沿岸部の高台に形成する前線拠点としての「町内コミュニティ」 18p
5. 30年後、若者と共に住まう「町内ニュータウン」 24p
6. 浪江町復興に向けた事業モデル 28p

浪江宣言 13・03 3. 浪江町―協働復興まちづくりのための10提言(案)・・・・ 31p

これまでの取り組み・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 39p

1. 浪江町の市民版復興シナリオ検討支援のプロセス 40p
2. 浪江町復興への道筋と24のプロジェクトの想定(2012年8月の報告書より) 42p

浪江宣言

13・03

2. 総意を協働復興の力に

浪江復興塾では2012年の8月に「浪江復興のための道筋と24のプロジェクト」をまとめて、発表しました。繰り返しワークショップで議論して提案した内容は、現実的なイメージと思っていましたが、発表したシンポジウムでは「夢」とか「希望」という言葉が飛び交いました。そして、この提案を取り上げてくださった福島民報の論点には「夢を復興の力に」という、私たちがまさに思っていたことがずばり表現されました。被災して住民がいなくなった浪江町では、時間が止まっていて、その止まっている間に復興の夢と希望を描いてみよう、というのが、昨年3月に始まった復興塾の最初の半年の目標でした。

そして、次の半年は、このことをベースにしながらも、動いている浪江の時間、すなわち避難している場所から、動いている暮らしを出発点にビジョンを描き、実現への具体的な道筋を描くことが目標になりました。仮設住宅で生活の復興もままならず、仕事の再建も見えない中で、この状態、この流れを何とか復興に向けて大きく舵を切るためのビジョンと方法を検討したのが、この半年間でした。

具体的な住宅やまちのイメージもワークショップでの俎上にあがり、「合意」ができたと言うより、さまざまな人や立場でさまざまな目標像があることを参加者が理解し合い、互いに認め合い「総意」を形成するプロセスを進めたといった方がよいでしょう。このようなものを、復興塾に参加なさらなかった方々にもご理解していただいて、「浪江町の総意」とすることができれば、これがまた復興に向けて大きな力になるでしょう。今後しばらくは、浪江町を離れて避難を続けながら、さまざまな生活の再建に向けて動きだし、形にしてゆくプロセスが進みます。多様な生活再建の姿がそれぞれで計画・実践されても、それらをお互いに理解し、相互に力づけるように連携し、つなぎ合わせて浪江のコミュニティを統合してゆくことが大切なのです。

ここでは、6つの始動プロジェクトの具体像を提案し、関係者の皆様と協働して実行したいと考えます。

分散から統合へーネットワーク・コミュニティによる浪江町の復興

そこで出てきたのが「ネットワーク・コミュニティ」という考え方です。さまざまな町外コミュニティ・仮の町、あるいは町内の帰還のための前線拠点が、それぞれ離れて存在していても、それらが密接につながって「一つの浪江」を維持し、育むイメージです。浪江町で親しまれていた注文に応じて利用できる小型バス「ぐるりんこ」を避難先で復活するなど、ネットワーク・コミュニティを支え、町民の生活を充実させるためには様々な仕組みを整えなければなりません。

まちづくり組織に結集しよう

そして、このような復興まちづくりを動かすには、行政や官の側だけではなく、民の側の力と活力は欠かせない、自らが進めなければ何も動かない、ということも、浪江塾のワークショップでは確認されました。被災者の皆さんには大変なことですが、生き生きとした復興の道筋は、主体性と自律性を基盤にしなければ進められないことはこの2年間を見れば明らかです。そのために具体的な像と内容を提案し共有して、実行するための役割を担うために必要ならば組織を立ち上げて、国・県そして浪江町の行政を動かし、協働して復興を進めることが次の段階の課題です。

その中核になるのは各種の「まちづくり会社」です。NPO 法人や協同組合、株式会社あるいは社会福祉法人など、地域の復興まちづくりに貢献するものはすべて広い意味の「まちづくり会社」です。

6つの始動プロジェクトを協働復興のシンボルに

そして、多様な市民セクターが結集して、市民の政府としての浪江町と強力な協働体制のもとで進めるのが、浪江町が目指す「協働復興まちづくり」です。政府や県も強力な復興支援のための財政措置や施策を用意しつつありますし、復興への基盤整備も動き出そうとしています。そして、「浪江宣言 13・03」に盛り込まれている提言も政府関係、国・県そして浪江町にも提出し、支援の方策や制度の整備を求めています。

そして、ここに提案する6つの始動プロジェクトを、様々な主体による協働の布陣を築いて実現し、協働復興のシンボルにしたいものです。

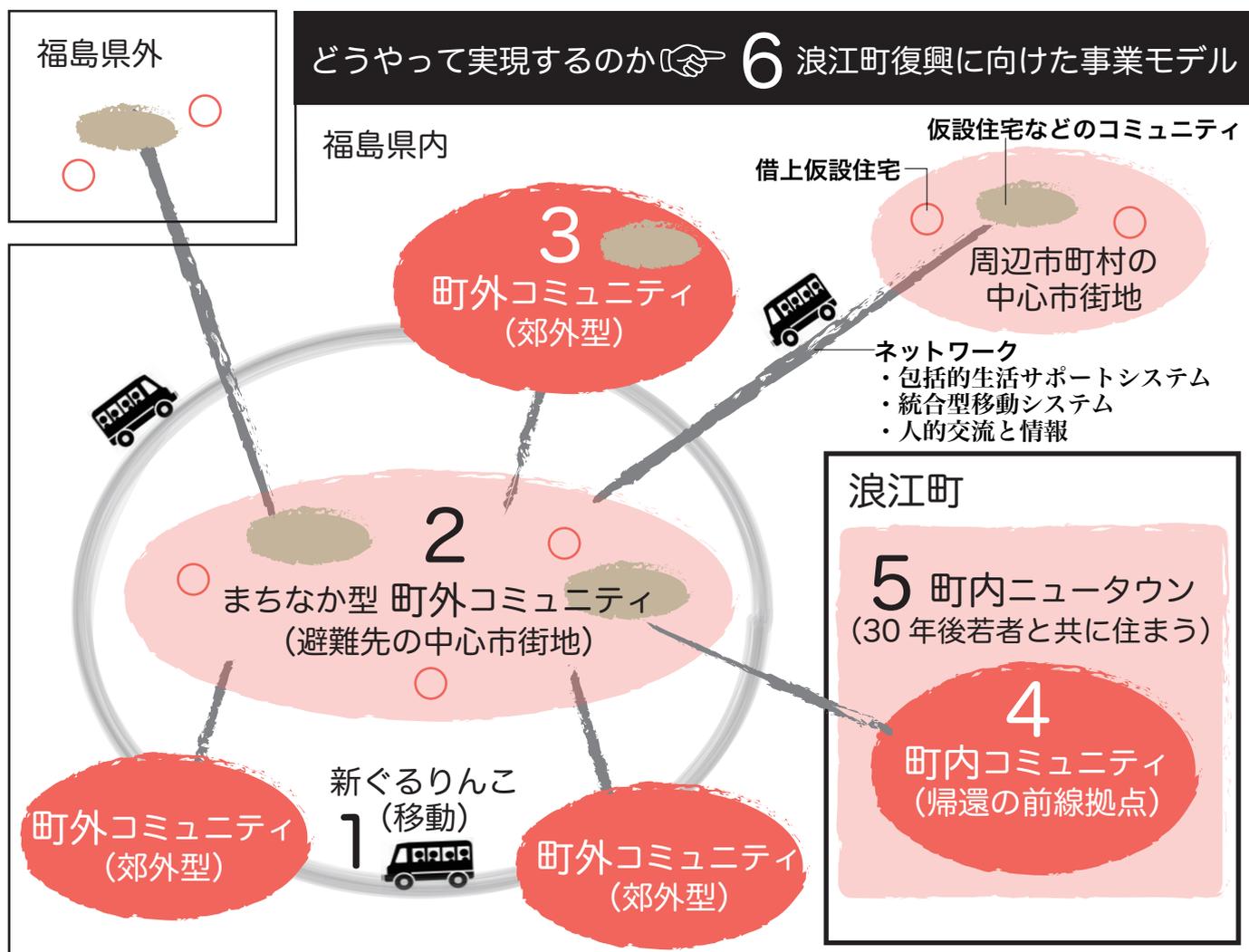
それぞれが自立して復興まちづくりを担い、また連携・連帯して復興まちづくりの全体像を描き出すことを、このレポートを元に進めたいと考えます。

協働復興まちづくりに向けた具体像と 実現に向けた協働の仕組みの提案

協働復興のプロセス

事業期間	第一段階 復旧始動期		第二段階 復興基盤形成期		第三段階 定住環境整備期		第四段階 本格的な帰還期	
	プロジェクト名	なかがよし号	みらい号	えんじょい号	なかがよし号	みらい号	えんじょい号	なかがよし号
1 新ぐるりんこ	試験運行	サービス形態の拡張	一時帰宅時の送迎	帰還の前線拠点での移動サポート				
2 まちなか型 町外 コミュニティ	準備	復興公営住宅、福祉・商業拠点などの建設						
3 郊外型 町外 コミュニティ	仮設住宅団地	居住環境改善	仮設住宅からの公営住宅へ	前線拠点へ				
4 帰還のための 前線拠点	準備	4 町内コミュニティの建設	仮設住宅団地の隣接地に建設	前線拠点へ				
5 本格的な帰還のためのニュータウン建設								
浪江町内の復興	除染作業	都市基盤整備	住環境整備					本格的帰還
	2013年	2015年	2018年	2020年	2025年	2030年		2050年

協働復興のための始動プロジェクトの位置づけ



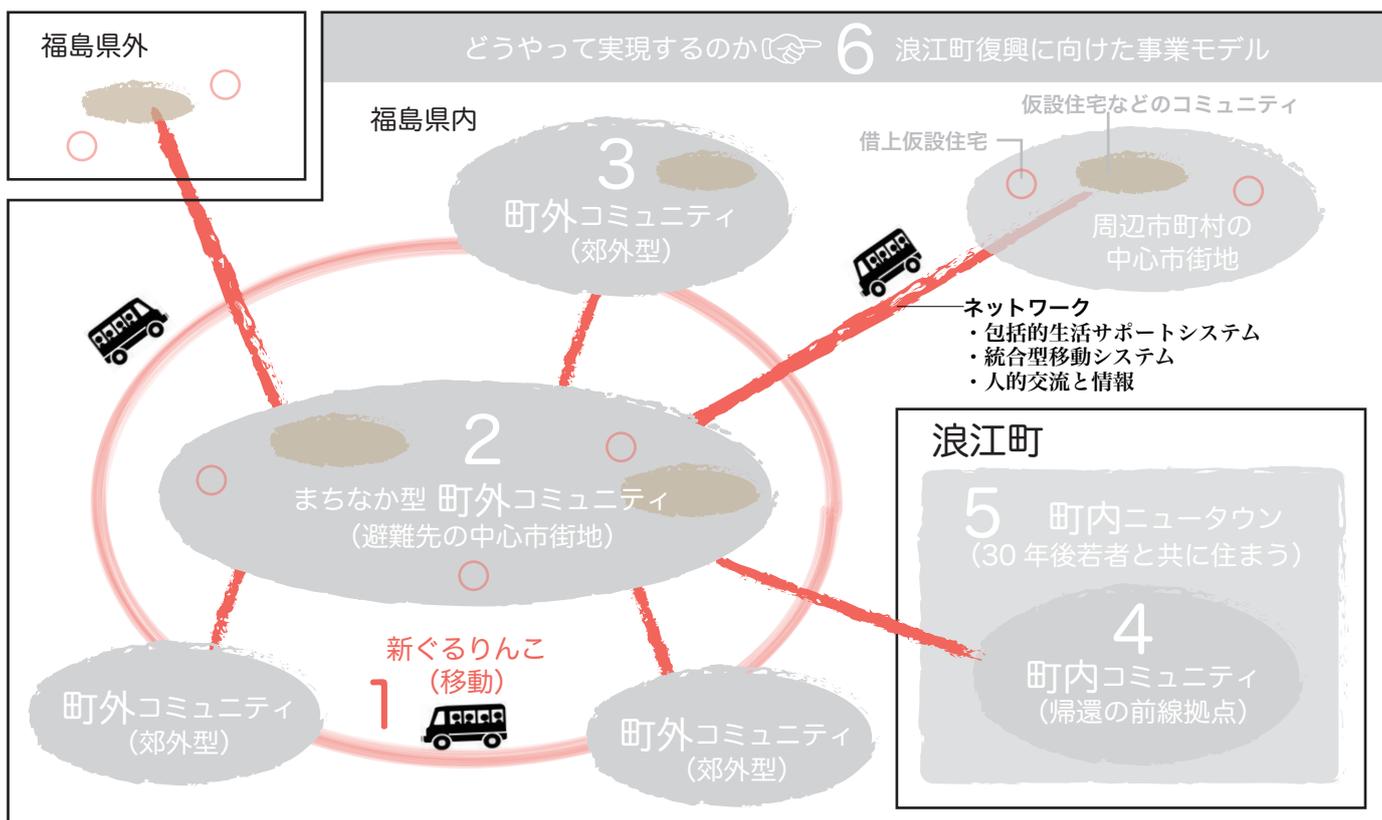
1. コミュニティをネットワークする統合型移動システム「新ぐるりんこ」

日常的な生活・浪江町への帰還・避難生活に楽しみを見つめる娯楽を目的とした統合型移動サービスでネットワークし、仮設住宅や借上仮設住宅での孤立しやすい暮らしを包括的にサポートするシステムを構築する。

ヒアリング調査等により、仮設住宅の規模や立地条件によって、移動に関するニーズは多様であること、多くの人々が、「どこに、どのような施設があるのか分からない」、「地理に不案内なため運転するのが怖い」といった不便・不安を感じていることが分かった。さらに、既存の移動サービスは、日常生活の一部をサポートするものに限定されていること、空き時間等を利用した車輛の有効活用が可能ながことが明らかとなった。

事業期間	第一段階 復旧始動期	第二段階 復興基盤形成期	第三段階 定住環境整備期	第四段階 本格的な帰還期
プロジェクト名				第四段階 本格的な帰還期
1 新ぐるりんこ	なかよし号	試験運行	サービス形態の拡張	
	みらい号	準備	一時帰宅時の送迎	帰還の前線拠点での移動サポート
	えんじょい号	企画の立ち上げごとに実施		
2 まちなか型 町外 コミュニティ	準備	復興公営住宅、福祉・商業拠点などの建設		
3 郊外型 町外 コミュニティ	仮設住宅団地	居住環境改善	前線拠点へ	
	復興公営住宅	仮設住宅団地の隣接敷地に建設		
4 帰還のための 前線拠点	準備	4 町内コミュニティの建設		
				5 本格的な帰還のためのニュータウン建設
浪江町内の復興	除染作業	都市基盤整備	住環境整備	本格的帰還
	2013年	2015年	2018年 2020年	2025年 2030年 2050年

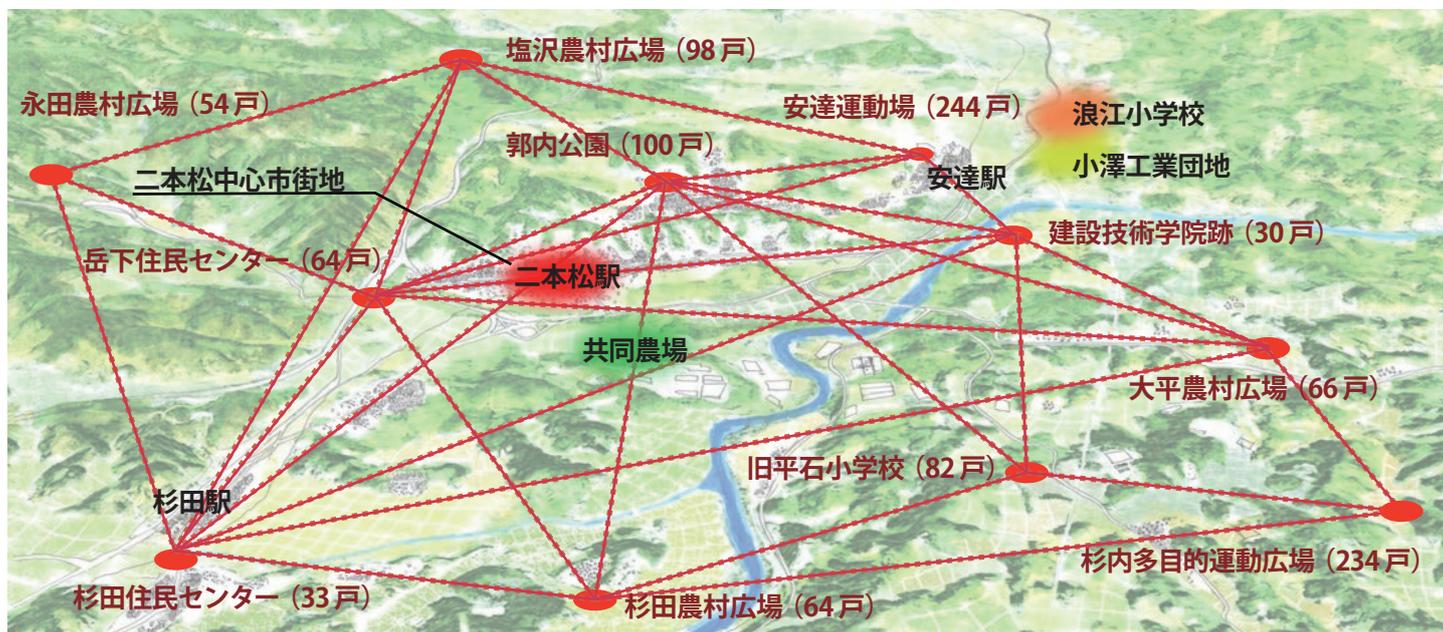
協働復興のプロセス：「新ぐるりんこ」



協働復興のための始動プロジェクト：「新ぐるりんこ」

統合型移動システム「新ぐるりんこ」

浪江町民を対象にした新たな統合型移動システム。
浪江町で運行していた「ぐるりんこ」を復活させ、二本松市に避難している浪江町民の生活を包括的にサポートする移動システム。

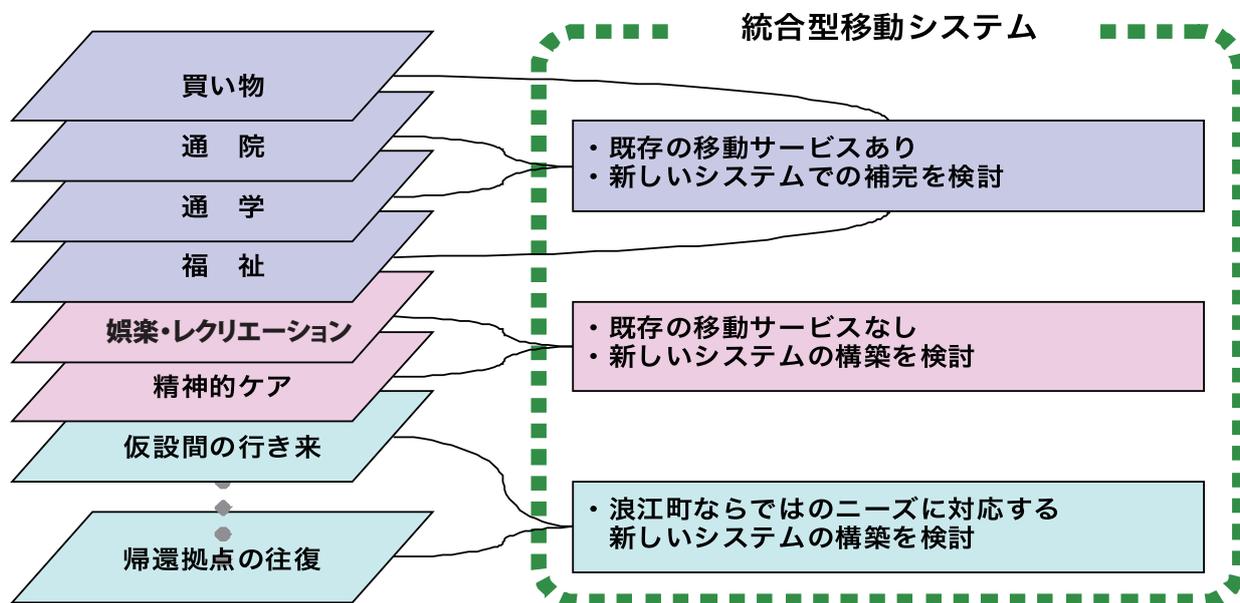


浪江町民のおもい

- ・仮設住宅・借り上げ住宅に住む方の約7割が普段から自分で自動車を運転している
- ・仮設住宅と借り上げ住宅との交流が比較的少ない
- ・借り上げ住宅に住む浪江町民と二本松市民の交流が比較的少ない
- ・移動範囲が広がってしまい、自動車の利用が増えた
- ・土地勘がなくなったため、あまり運転しなくなった
- ・交通量が多く、坂が多いため、自動車の運転に不安がある
- ・避難している自治体ではどこに何があるのかが分からない

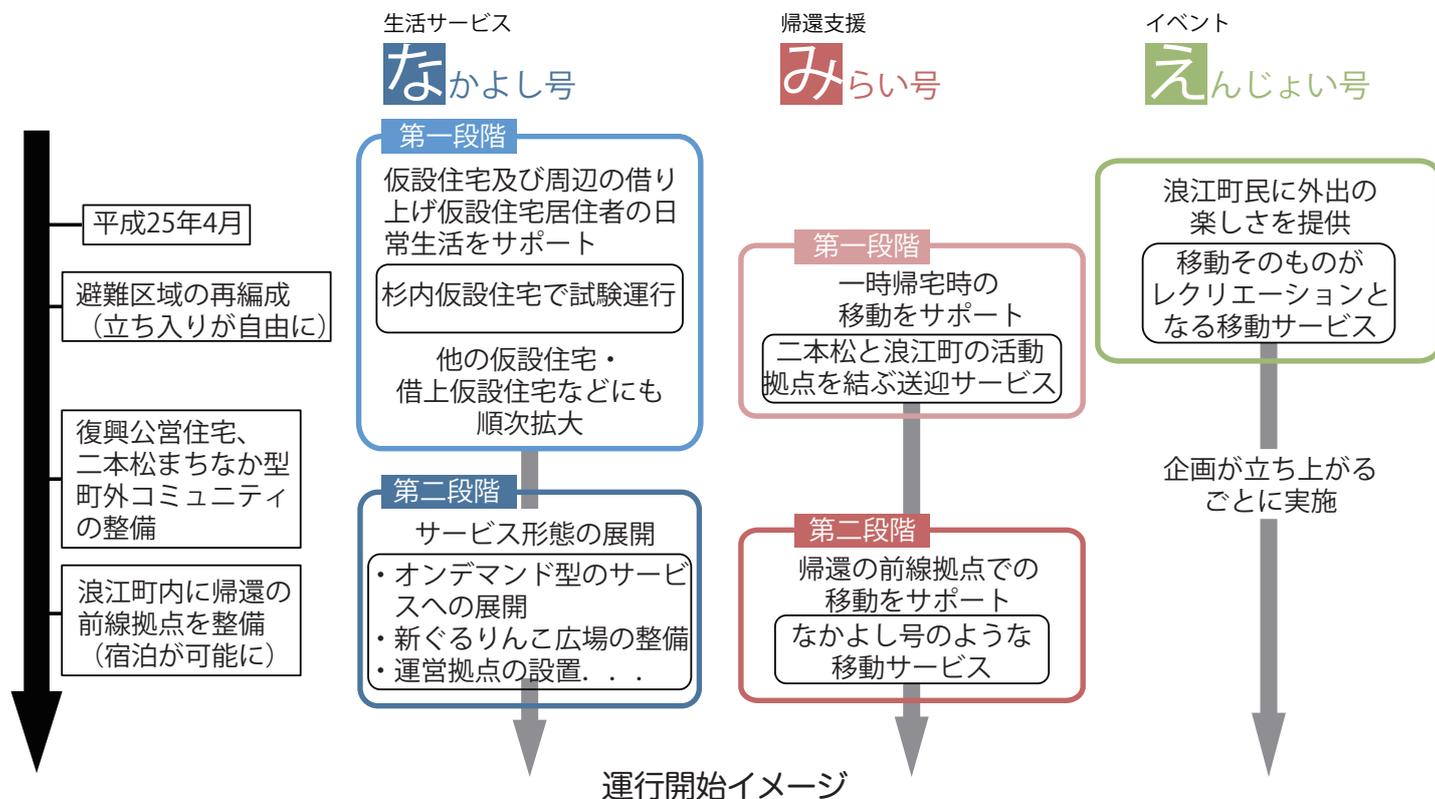
自動車を運転できない、または運転が不安である、どこにどんな場所があるのかが分からないなど、日常生活で、外出に不安を感じている人が多くいる。
(2012年11月ヒアリング調査より)

新ぐるりんこは、日常生活の移動（買い物・通院・通学・福祉）を既存のサービスと新しいシステムでサポートし、娯楽・レクリエーション・精神的ケアの要素を付加しつつ、仮設（借上）住宅間の行き来、浪江町内の帰還拠点との連絡を統合した移動システムである。



新ぐるりんこの三つのサービス内容

買い物や通院といった日常生活における外出、浪江町への一時帰宅といった浪江町民ならではの外出、さらには分散してしまったコミュニティをつなぎ合わせるような活動、これらをサポートしていく三つの移動サービスによって構成される。



なかよし号

第一段階

「できることから」という意識のもと、個々の仮設住宅を中心に、仮設住宅及び周辺の借上仮設住宅の居住者の買い物や通院などの日常生活での外出をサポートするなかよし号の運行を開始する。

検討項目

- ・杉内仮設住宅で実際に始まるなかよし号の詳細（2013年4月より実施）
- ・仮設住宅ごとの特性を踏まえた、移動サービスへのニーズの把握

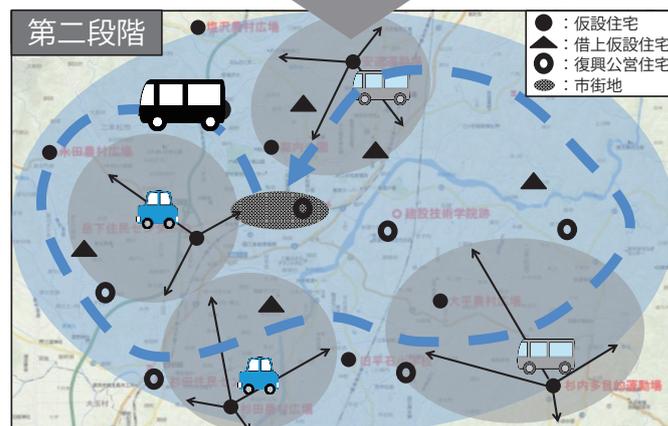
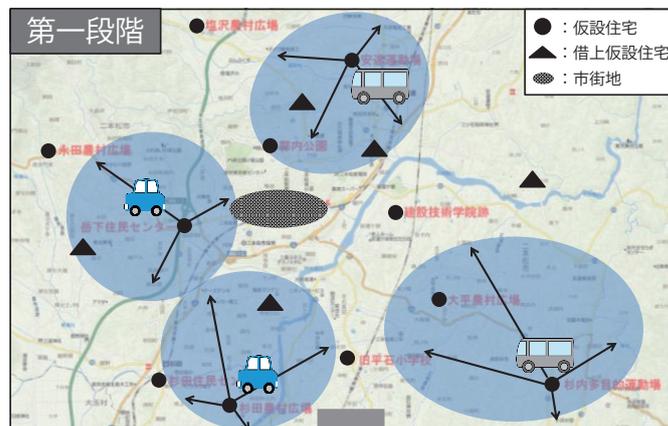
第二段階

復興公営住宅、まちなか型町外コミュニティ、郊外型町外コミュニティの整備など、生活環境の変化に対応した移動システムが必要となる。

二本松市全体をカバーする、新たなサービス形態のなかよし号が走り始める。

検討項目

- ・サービスの形態と対象（オンデマンド型のサービス、二本松市民への拡大）
- ・ぐるりんこ広場の整備
- ・運営拠点の整備...



なかよし号の事業拡大イメージ

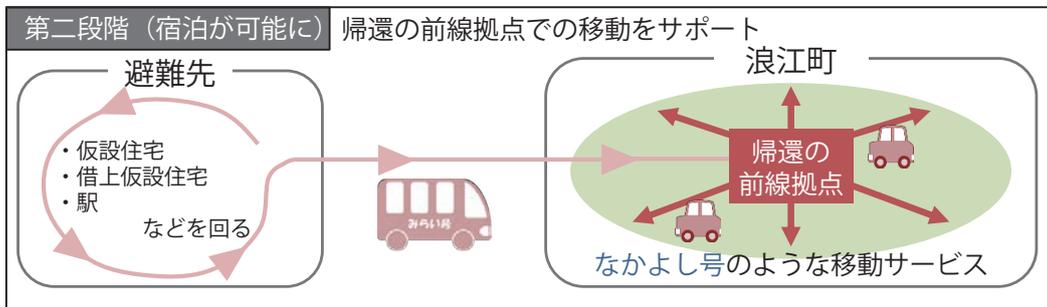
第一段階（一時帰宅）

避難先と浪江町の初期の活動拠点を結ぶ。避難先の仮設住宅・借上仮設住宅や駅など主要な施設を回り、一時帰宅を行う浪江町民のための送迎サービスとなる。



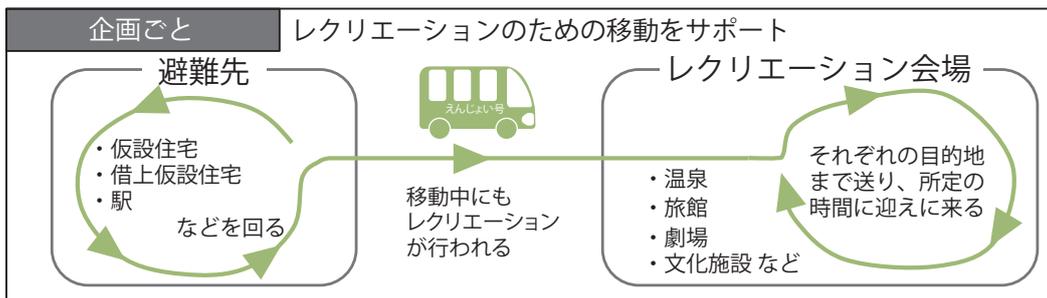
第二段階（前線拠点での宿泊が可能に）

浪江町での宿泊が可能となる段階においては、帰還の前線拠点においてもなかよし号のような移動サービスを開始する。



運行時期：企画が立ち上がるごとに実施

移動自体がレクリエーションとなる移動サービスである。引きこもりがちな人を対象に外出の楽しさを提供するために、移動しながらカラオケやお茶会を開催する。



ログハウス型トレーラーハウス
移動しながら車内でお茶会を開催



対面型座席バス
移動しながら車内でカラオケを開催